

河岸の立地形態と空間構成に関する研究

清水 健弘¹・須賀 周平²・二井 昭佳³

¹ 非会員 国土館大学大学院工学研究科 建設工学専攻

(〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1 E-mail: s7me207c@kokushikan.ac.jp)

² 非会員 株式会社ヨシモトポール 設計部 設計1課

(〒100-0006 東京都千代田区有楽町 1-10-1 有楽町ビル 7F E-mail: suga-syuhei@ypole.co.jp)

³ 正会員 国土館大学理工学部 まちづくり学系 准教授

(〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1 E-mail: nii@kokushikan.ac.jp)

本稿は、徳川幕府に認められた利根川の境河岸から銚子河岸までの44河岸を対象に、河岸の立地形態と空間構成の特徴について考察したものである。その結果、①河川の直線区間の川岸に船着き場を設けるものが基本タイプであり、曲線区間に立地する場合には圧倒的に外側が多く、水路や湾入地形といった内陸に入り込んだ位置に河岸を設けていること、②河岸のまちの形態は、水害対策や物流の観点、街道や参道利用に依存して決定されていること、また③他とは隔離された遊郭や、水運の利用者の立ち寄りを考慮した茶屋など水辺の施設と、水害の影響を受けにくい微高地に設けられた回船問屋や神社など、水辺利用と水害を考慮した空間構成になっている可能性を指摘した。

キーワード：利根川、河岸の立地形態、河岸の空間構成、絵図

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

古くから都市やまちの発展には、水辺が深く関わってきた。世界的に見てもアムステルダムやロンドンなど多くの都市では、その中心に水辺が存在している。日本でも江戸や京都など、水運の発達により、周辺地域から物資が集められ大きく発展してきた。こうした舟運を支える港のうち、河川に設けられた河岸に注目する。

河岸は、とくに江戸時代中期頃から年貢米などの内陸部の輸送拠点として発展し、船着場のほか、積荷を扱う船積問屋や商店、旅籠といった施設が集積し、多くの人で賑わう場所であった。そのため河岸の盛衰が地域の発展に大きな影響を与えていたとされている¹⁾。

これまで河岸に関する研究は、主に水上交通史や都市史の観点から行われてきた。なかでも川名による『河岸²⁾』は河岸に関する機能や文化などを総合的に取り扱っており、参考にする点が多い。また河岸の制度的な観点については丹治³⁾によるものなどが挙げられる。その一方で、河岸の立地や空間構成に関する研究は、石川⁴⁾や田中⁵⁾など比較的少ない。とくに流域の河岸群を対象に、その立地形態や空間構成の特徴を明らかにする研究はほとんどおこなわれていない。しかし、水運に適した場所は、洪水の危険性の高い場所であることも多く、それらの相

反する課題を解き、まちとしての河岸を成立させていたのか非常に興味深い。

そこで本研究では、①河岸の立地形態と②その空間構成の特徴を明らかにすることで、まちと水辺の関わりについて考察することを目的とする。

(2) 研究の対象と方法

研究の対象は、河岸吟味などにより徳川幕府に認められた利根川の境河岸から銚子河岸までの44河岸とした。その理由は、①これらは江戸を支える水運のネットワークであり、②利根川的主要河岸として扱われていること。また、③利根川図志など江戸時代の資料により当時の様子が確認できるものがあることによる。

研究の方法として、2章では利根川河岸の概要を把握し、3章では対象河岸の立地形態を明治前期の地形図を用いて



図-1 対象とする利根川と河岸の位置
(利根川荒川事典⁵⁾ 付録図に筆者加筆)

分類し、立地の特徴を分析した。4章では対象河岸44箇所のうち、利根川図志などの絵図が存在する15箇所を対象とし河岸の空間構成について整理した。

2. 利根川河岸の概要

近世以前の利根川は、佐波（現、埼玉県大利根町）の少し上流から南流し、東京湾に流れており、しばしば江戸に水害をもたらしていた。こうした状況を受け、江戸幕府により元和7（1621）年から承応3（1654）年にかけて江戸川上流の開削など利根川に関する土木工事（利根川東遷）が行われた。これにより流域の新田開発が盛んになると、利根川水系は交通の大動脈としての役割を果たすようになる。

東遷後の元禄3年（1690年）に徳川幕府が行った元禄河岸吟味は、関東全域の河岸の間屋数や年貢米を運んだ場合の運賃などを調査したもので、安永期や明和期にも行われた。これらの河岸吟味で、利根川では44河岸が幕府公認となり、常陸・下総・下野・上野・武蔵の流域のほか、奥州や信越からも年貢米や雑穀などが河岸に運ばれ、舟運で江戸に送られた。

3. 利根川河岸の立地形態の特徴

(1) 分析の視点

利根川河岸の立地形態の特徴を把握するために、明治前期に作成された第一軍管区地方二万分一迅速測図を用いて、a) 船着場の立地形態、b) まちの形態、c) 河川線形からみた河岸の立地、d) 河岸の立地高さについて注目した。なお、それぞれの河岸や船着き場の位置については当該市町村誌などを用いて確認している。

(2) 利根川河岸のタイプ分類

a) 船着場の立地形態

船着場の立地形態を、本川沿いに設けられる川岸型、本川と接続する湾入地形に設けられる湾入型、支流や水路により内陸部に設けられる水路引込型の大きく3つに分類し整理した（図-2 赤線部）。

その結果、最も多いタイプは川岸型で全体の6割（27/44）を占め、残りの湾入型（8/44）、水路引込型（9/44）が2割程度ずつとなった。

b) 町の形態

町の形態を、街路と平行にまちが構成される列状、面的な広がりを持つ塊状、船着場と町の中心部が離れてい

る船着場分離状に分類した（図-3）。また列状はさらに河川に対して平行に構成されている平行列状、垂直に構成されている垂直列状に分けて整理した。

その結果、塊状（19/44）と平行列状（16/44）が最も多く、この2つで約8割を占めている。また数は少ないものの、河川よりも街道を優先している垂直列状や、船着場分離状については、その成立理由について後に考察する。

c) 河川線形からみた河岸の立地

河川の直線、曲線区間のいずれに河岸が立地していたのかを把握した。曲線区間については、曲線の内側・外側とも区別した（図-4）。

その結果、直線区間（26/44）がやや多く、全体の6割を占めている。曲線区間では、曲線外側の割合が圧倒的に多く、曲線区間の約9割（16/18）を占める結果となった。

	川岸型	水路引込型	湾入型
概念図			
例	37. 矢田部河岸	29. 佐原河岸	26. 結佐河岸
個数	27/44 約 61%	8/44 約 18%	9/44 約 21%

図-2 船着場の立地位置

	列状		塊状	船着場分離状
	平行	垂直		
概念図				
例	10. 布佐河岸	1. 境河岸	41. 野尻河岸	19. 源太河岸
個数	16/44 約 36%	3/44 約 7%	19/44 約 43%	6/44 約 14%

図-3 河岸の町の形態

	直線区間	曲線区間	
		曲線外側	曲線内側
概念図			
例	43. 松岸河岸	12. 藤蔵納屋	24. 神崎神宿
個数	26/44 約 59%	16/44 約 36%	2/44 約 5%

図-4 河川線形からみた河岸の立地

d) 河岸の立地高さ

国土地理院の電子国土地図の土地条件図を用いて、河岸の立地地形を把握したところ、台地型と自然堤防などの微高地型の2種類が存在した。その割合としては、微高地型が全体の約9割を占めており、台地型は利根川上流部にのみ存在した。

(3) 河岸の立地形態の関係性

前項で整理した河岸のタイプ分類をクロス集計し、それらの関係性について把握をおこなう。

	台地型	微高地型
例	1 境河岸	24 神崎河岸
		
個数	5/44 11%	39/44 89%

図-5 河岸の立地高さ

表-1 対象河岸の立地形態一覧

	河岸名	船着場立地	河岸の形態	河川線形との位置	立地
1	境	川岸	垂直列	直線	台地
2	長谷	川岸	分離	直線	台地
3	小山	川岸	平行列	直線	台地
4	木野崎	水路	分離	直線	微高
5	瀬戸	川岸	塊	直線	台地
6	布施	川岸	分離	直線	微高
7	取手	川岸	平行列	直線	微高
8	小堀	川岸	分離	曲線外側	台地
9	布川	川岸	平行列	直線	微高
10	布佐	川岸	平行列	直線	微高
11	木下	川岸	平行列	曲線外側	微高
12	藤蔵納屋	川岸	塊	曲線外側	微高
13	安食	川岸	平行列	直線	微高
14	北辺田	川岸	分離	直線	微高
15	十里	川岸	平行列	直線	微高
16	田川	川岸	平行列	曲線外側	微高
17	安西	水路	平行列	直線	微高
18	西大須賀	水路	分離	曲線外側	微高
19	滑川	水路	平行列	曲線外側	微高
20	源太	川岸	塊	曲線外側	微高
21	金江津	湾入	塊	曲線外側	微高
22	高岡	水路	平行列	曲線外側	微高
23	押砂	川岸	塊	曲線外側	微高
24	神崎新宿	川岸	塊	曲線内側	微高
25	神崎本宿	川岸	塊	曲線内側	微高
26	結佐	湾入	平行列	曲線外側	微高
27	江口	湾入	平行列	曲線外側	微高
28	川尻	川岸	平行列	直線	微高
29	佐原	水路	塊	曲線外側	微高
30	津の宮	川岸	平行列	直線	微高
31	小見川	水路	垂直列	曲線外側	微高
32	阿玉川	水路	塊	直線	微高
33	高浜	川岸	塊	直線	微高
34	芝崎	湾入	塊	曲線外側	微高
35	萩原	川岸	塊	直線	微高
36	日川	川岸	塊	直線	微高
37	矢田部	川岸	塊	直線	微高
38	笹川	湾入	垂直列	直線	微高
39	新宿	川岸	平行列	直線	微高
40	小舟木	川岸	塊	直線	微高
41	野尻	湾入	塊	直線	微高
42	高田	湾入	塊	直線	微高
43	松岸	湾入	塊	直線	微高
44	銚子	湾入	塊	曲線外側	微高

a) 船着場の立地位置と町の形態の関係

川岸型では、約4割が平行列状と塊状の町の形をしている。湾入型では塊状の町が6割以上を示している。また船着場分離では川岸型が6割以上を占める。

組み合わせの多い川岸型平行列状は川のすぐ近くに平行した道が存在し、水運から陸運への移行を円滑にするため形成された可能性がある。布佐河岸の例では、江戸川の松戸河岸を繋ぐ松戸街道と接続しており、布佐で荷揚げされた鮮魚が松戸を経由し、江戸へ送られていた。このような陸運で別の河岸に送られる例は木下河岸などでも見られる。

同じように道が影響しているものとしては川岸型垂直列状がある。境河岸の例では町の中央に日光街道の脇街道が通り、奥州から運ばれてきた荷物を水運に積み直して江戸へ送っていた。また、笹川河岸では船着場から内陸の神社へ繋がる道が存在しており、河岸や参道が垂直列状の町の形成に繋がっているのではないかと考える。

表-2 船着場の立地位置と町の形態の関係

	列状		塊状	分離	計
	平行列	垂直列			
川岸型	11	1	11	4	27
湾入型	2	1	6	0	9
水路型	3	1	2	2	8
計	16	3	19	6	44

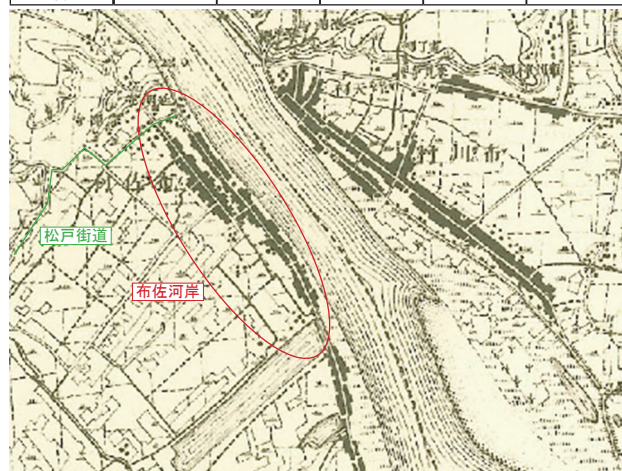


図-6 川岸型 平行列状 例：布佐河岸

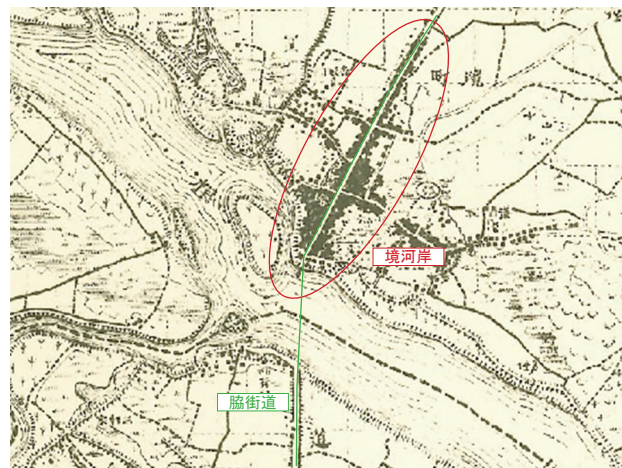


図-7 川岸型 垂直列状 例：境河岸

b) 船着場の立地位置と河川線形との位置の関係

川岸型では直線区間に位置するものが約7割で全体でも4割以上を占めるため、この組み合わせが基本だと思われる。曲線型の外側に立地するものが多く、直線区間と合わせると約9割を占めていることが分かる。

立地位置の割合から見ると水路型と曲線区間外側の組み合わせが6割以上と最も高い割合を占めている。この例として佐原河岸を見ると水路を引き込んだ先に集落が存在している。集落は利根川本流から離れた位置に存在しており、水害対策のひとつとして形成されたのではないかと考える。

一方で曲線区間外側に川岸型で存在している木下河岸に注目してみる。木下河岸は手賀沼と利根川を繋ぐ水路などがある河畔に立地している。高低差を見ると集落がある部分は利根川より4mほど高いが、その周辺は川の高さとほとんど変わらず、多くの水害の被害を受けたとされている⁷⁾。しかし、利用者が多い木下街道が整備され

表-3 船着場の立地位置と河川線形との位置の関係

	直線タイプ	曲線タイプ		計
		外側	内側	
川岸型	19	6	2	27
湾入型	4	5	0	9
水路型	3	5	0	8
計	26	16	2	44



図-8 水路型 曲線外側区間 例：佐原河岸

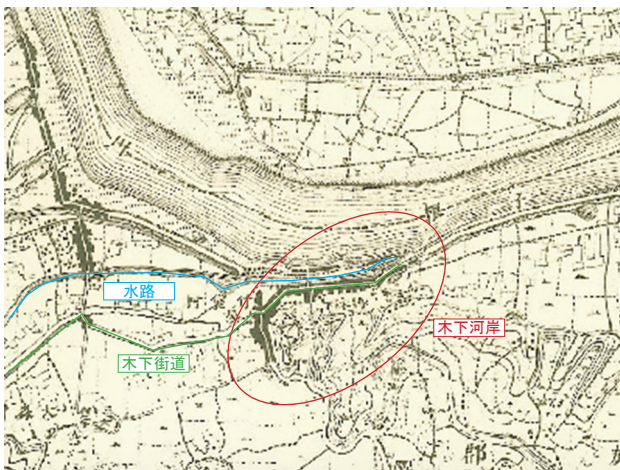


図-9 川岸型 曲線区間 例：木下河岸

ていたことや利根川と手賀沼の船の管理がしやすかったことなど立地的に恵まれていた。そのため、水害の危険性があったとしても河畔を利用したのではないかと考える。

(4) 流域位置から見た分析

分類の視点を対象河岸44ヶ所にあてはめ、船着場の立地位置のデータを地図上にプロットした。

プロットした地図を見ると川岸型は利根川全体に立地している。しかし、水路型は主に中流域に、湾入型は中流から下流にかけて立地している。

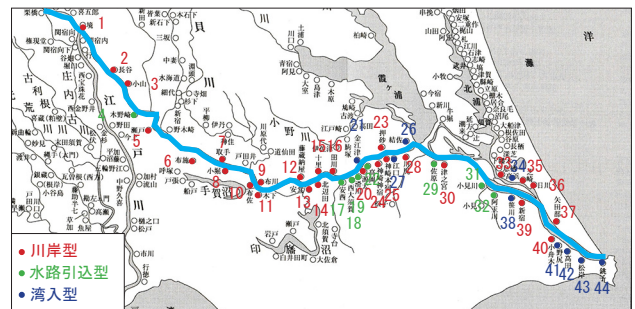


図-10 船着場立地の特徴

(5) 河岸の立地形態の特徴

- ・河岸の立地形態の基本的なタイプは、a) 船着場の立地位置の6割を占める川岸型、b) 町の形態の4割ずつを占める塊状と平行列状、c) 河川線形から見た河岸の立地の6割を占める直線区間、d) 河岸の立地高さの9割を占める微高地型だと考えられる。
- ・a) 船着き場とc) 河川線形の組み合わせでは、川岸型の7割が直線区間であり、この組み合わせを基本に河岸が形成されたと思われる。また湾入型、水路型は河川線形の曲線区間外側が多く、洪水など河川の影響を受けにくくするためではないかと考える。
- ・b) 町の形態として、平行列状は水運から陸運への移行の円滑化の観点から、垂直列状は街道や参道利用などの観点から河岸が変化したと考える。
- ・b) 町の形態とc) 河川線形の組み合わせでは、水路型と曲線区間外側が6割以上を占めている。水路を引き込み、集落は利根川本流から離れた位置に存在した例があることから、水害対策として形成されたのではないかと考える。曲線区間外側に川岸型は水害の危険性がある河畔に立地していた例もあるが、街道が整備されていたことや船の管理がしやすい立地であったため、利用したのではないかと考える。
- ・c) 河川線形の曲線区間では、曲線外側の割合が圧倒的に多く、曲線区間の約9割(16/18)を占める結果となった。曲線区間内側は、神崎にある神宿河岸と本宿河岸の二つのみだが、周辺よりも10mほど高い神崎神社が集落の中心に位置していることが、河岸の形成に影響しているのではないかと考える。

4. 絵図に見る河岸の空間特徴

(1) 対象河岸と着目点

対象とする絵図は「利根川図志」と「下総名勝図絵」で確認できるもので15ヶ所ある。絵図には文字で示した建物などが描かれており、船着場の形や神社や問屋などの立地が把握できる。そのため、絵図に描かれている構成要素を整理し、河岸の空間構成の特徴をまとめた。

(2) 絵図から見る空間の特徴把握

絵図を見ると、河畔にも建物が立ち並んでおり、水辺に近接する茶屋や遊郭なども確認できる。松岸河岸では、湾入部の島に遊郭が存在しており、まちと隔離するように立地している。木下河岸では船着場に隣接した位置に茶屋や旅籠があり、水運の利用者の立ち寄りを考慮した

表-4 絵図に描かれた空間構成

	河岸名	絵図資料	問屋	寺社	街道	船着場	遊郭
1	境	下総名所図絵			○		
2	布川	利根川図志	○	○		○	
3	木下	利根川図志	○		○	○	
4	安食	下総名所図絵		○		○	
5	西大須賀	下総名所図絵		○			
6	源太	利根川図志	○	○		○	
7	押砂	利根川図志	○			○	
8	神崎本宿	利根川図志		○		○	
9	佐原	下総名所図絵		○			
10	津の宮	利根川図志		○		○	
11	小見川	下総名所図絵				○	
12	阿玉川	下総名所図絵				○	
13	笹川	下総名所図絵		○			
14	松岸	下総名所図絵					○
15	銚子	下総名所図絵				○	

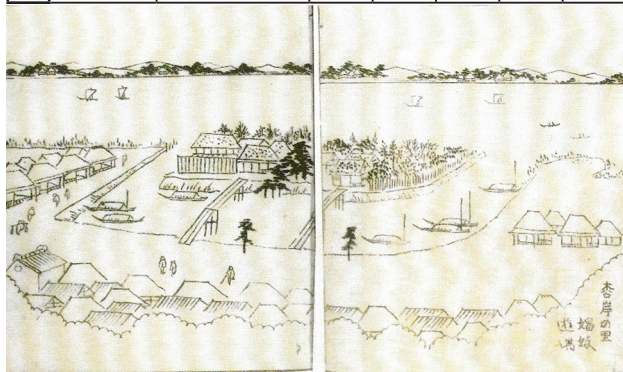


図-11 松岸河岸

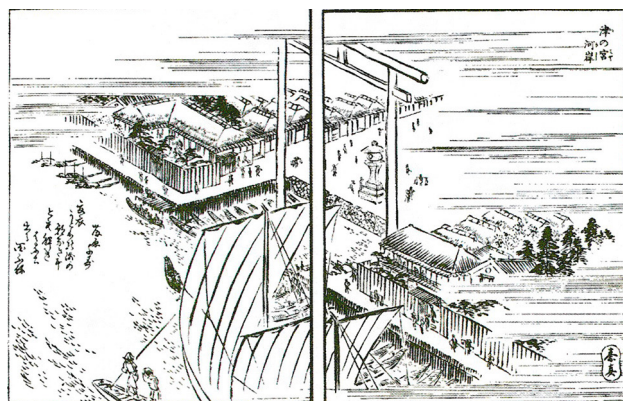


図-12 津の宮河岸

立地になっている。また同河岸では、微高地に街道や舟を管理した問屋があり、重要な機能は水害の影響を受けにくい立地にしているようにみえる。

神社が描かれている絵図をみると、神社は他の集落の建物よりも内陸の高台に立地している。津の宮河岸では、神社自体は内陸に位置しているが船着場に鳥居があり、香取神社に続く参道に接続している。参道には旅籠屋もあったとされ、神社の存在が河岸に影響を与えた例として挙げられる。

5. 結論

本研究では以下の成果を得た。

- ・利根川の河岸は、河川の直線区間の川岸に船着き場を設けるものが最も多く、これが基本タイプであること、また曲線区間に立地する場合には圧倒的に外側が多く、水害を避けるために、水路や湾入地形といった内陸に入り込んだ位置に河岸を設けていることを指摘した。
- ・河岸の形態は、洪水対策といった河川条件、水運と陸運の接続といった物流の条件、街道や参道利用といったまち側の条件と深く関連していることを指摘した。また、河岸によっては水害の危険性があるものの、水運の利便性が優先された可能性を挙げた。
- ・河岸の構成要素のうち、遊郭の他とは隔離する立地や茶屋などの水運の利用者の立ち寄りを考慮した立地があることを指摘した。
- ・回船問屋や神社などは水害の影響を受けにくい立地である可能性を指摘した。また内陸の神社の存在が船着場など河岸の空間構成に影響を与える場合があることを指摘した。

今後は、各河岸の成立経緯や、絵図に加え村絵図や地籍図を用いて、その空間構成について分析していきたい。

参考文献

- 1) 埼玉県, 荒川総合調査報告書, 1987.
- 2) 川名登, 河岸, 法政大学出版局, 2007.
- 3) 丹治健蔵, 関東河川水運史の研究, 法政大学出版局, 1984.
- 4) 石川幹子, 明治以降の東京下町における亀島河岸の歴史的変遷に関する研究, 都市計画論文集, 2011.
- 5) 田中尚人, 舟運を基軸とした京都高瀬川沿川の都市形成に関する研究, 土木計画学論文集 No. 17, 2000.
- 6) 利根川文化研究会, 利根川荒川事典, 国書刊行会, 2004.
- 7) 印西町史編さん委員会, 印西町史 民俗編, 印西町, 1996.